現実と追憶の揺らぎのなかで

―カズオ・イシグロ *A Pale View of Hills* 試論―

長　柄　裕　美*

The Vacillation between Reality and Retrospection in Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills*

NAGARA, Hiromi

カズオ・イシグロ（1954-）の小説では，戦争の影響が影を落とす時代，とりわけ1950年代が好んで取り上げられる。特に初期三長編にはこの傾向が顕著に認められる。処女長編 *A Pale View of Hills*（1982）と次作 *An Artist of the Floating World*（1986）は，ともに第二次世界大戦後間もない1950年前後の長崎がその主な舞台であり，第三作目の *The Remains of the Day*（1989）では1957年を生きる主人公が第二次大戦前後のイングランドを追想する。よく知られるように，カズオ・イシグロは1954年11月8日長崎に生まれ，1960年わずか5歳の時に，海洋学者である父の仕事の関係で家族と共にイギリスはサリー州ギルフォードへ移住している。以後40年余り，1989年の作家としての短い日本滞在を除いては，移住10年後の祖父の死に際してすら帰国することなく，日本から遠ざかっている。(1) さらに1983年には国籍もイギリスに移したという。イギリス人としての人生を選択したかに見えるイシグロだが，彼にとって1950年代は，わずかに残る日本の記憶の拠り所でもあったと思われる。彼にとって戦後とは，1950年代とは，そして日本とは何を意味していたのだろうか。この小論では，処女長編 *A Pale View of Hills* の分析を通して，これらの問題に対する考察を試みる。

三人の女性の「子殺し」連鎖

A Pale View of Hills は，1970年代後半と思われるイングランドに住む日本人女性エツコ（Etsuko）が，長女ケイコ（Keiko）の自殺という重い現実を抱えつつ，四半世紀を遡る1950年前後の長崎での自らの記憶を辿っていく物語である。(2) 戦後復興期の一夏の知り合いであったサチコ（Sachiko）とその娘マリコ（Mariko）との関わりを辿るうちに，いつしかそれは自分自身とケイコとのその後の人生に重ねられていくことになる。エツコとサチコ，マリコとケイコの類似性を明確に指摘する言葉はないにもかかわらず，描写の反復という手法によってイシグロはそのイメージの重複を見事に印象づける。さらにこの類似の連鎖は，サチコとマリコが終戦後の東京で見た女性とその赤ん坊の一瞬の映像へと遡ることとなり，その結果「東京の女性」，サチコ，エツコの三人の女性のイメージの連鎖は明白なものとなるのである。

エツコとサチコとのつきあいは「何年も昔のある夏の，ほんの数週間」のものであり、エツコは「サチコのことがよくわからなかった」（Part I, Chap. 1, p.11）と言う。しかし母を慰めに来た次女

*国際言語文化講座，英米文学

ニキ（Niki）とケイコの死を空しく語り合ううちに，エツコはサチコとマリコにまつわる記憶をまざまざと思い出す。それは第二次大戦での原爆投下の被害から立ちあがり，ようやく将来への希望が感じられ始めた長崎でのことである。エツコは原爆で家族と婚約者を失い生きる希望を失うが，身寄りのない彼女を引き取ってくれたオガタさん（Ogata-San）の長男ジロー（Jiro）と結婚し，初めての子供を身ごもっている。市東部の川の近くに新しく建てられたコンクリートの社宅に住み，エレクトロニクス関係の会社に勤務するジローの仕事も順調で，過去を振り返らず未来を信じて生きようと考えている。その社宅と川との間には，土埃とどぶばかりの数エーカーの空き地が広がっており，サチコの家はその空き地を隔てた川岸に建つ古い木造の一軒家である。サチコには戦死した夫との間にマリコという10歳くらいの娘がいるが，彼女はフランク（Frank）というアメリカ人との恋愛に振り回されて，敏感なマリコの心情を察してやる余裕がない。エツコはサチコの生き方を半ば批判的に見つつも彼女との友人関係を保ち，マリコの身を案じて社宅と一軒家との間の空き地を何度も往復しながら，母子との関わりを深めて行く。

マリコは病的な心理状態を示す少女であるが，なかでも彼女が強い執着を示すイメージは「川向こうに住む女性」である。この女性は繰り返しマリコの話の中に現れ，母サチコの留守中にやってきてはマリコを川向こうの自分の家へ連れていこうとするという。

> "The woman from across the river. She was here last night. While Mother was away."
> "Last night? While your mother was away?"
> "She said she'd take me to her house, but I didn't go with her. Because it was dark. She said we could take the lantern with us" — she gestured towards a lantern hung on the wall — "but I didn't go with her. Because it was dark." (Part I, Chap.1, p.19)

サチコはこれをマリコの作り話だと言うが，やがてサチコ自身の口からこの女性のイメージの源が明かされる。それは終戦直後の東京の荒れ果てた状況のなかで，サチコと当時5歳のマリコが目撃する子殺しの場面である。

> "There was a canal at the end and the woman was kneeling there, up to her elbows in water. A young woman, very thin. I knew something was wrong as soon as I saw her. You see, Etsuko, she turned round and smiled at Mariko. I knew something was wrong and Mariko must have done too because she stopped running. At first I thought the woman was blind, she had that kind of look, her eyes didn't seem to actually see anything. Well, she brought her arms out of the canal and showed us what she'd been holding under the water. It was a baby. I took hold of Mariko then and we came out of the alley." (Part I, Chap.5, p.74)

サチコはこの女性が2，3日後に喉を切って自殺をしたという噂を聞いたというが，この場面を目撃してしまったマリコは，約1ヶ月後にこの女性に対する妄想の症状を示し始めたという。

この女性の子殺しとケイコの死は，遠い距離を保ちつつ共振し合う。ケイコの死は自殺であったが，それは自分が殺したに等しいのではないかという罪悪感が現在のエツコの内部にはあり、女性の子殺しのイメージが特別の意味を持って甦ってくる。そしてこの二人の女性の子殺しの連鎖を繋ぐのが，この夏にエツコが目撃したサチコとマリコ母子の記憶であった。

マリコは社会性が乏しく，学校へも行かなければ同年代の子供と遊ぶこともほとんどない。遊び相手は猫だけである。一日中子猫に寄り添い，子猫を撫でて自らを慰めるほかに心の拠り所のないマリコにとって，子猫の将来は重大問題である。サチコがフランクの言葉に振り回されて，アメリカへ，伯父の家へ，神戸へと今後の行き先を変えるたびに，マリコは子猫の身の処し方を心配する。それはほとんど自分の存在を子猫と同一視しているかのように思える。エツコと二人で留守番をしているある夜，それを象徴的に示すマリコの行動が現れる。以前飼っていた猫がいつも捕まえていたと言って，エツコが止めるのも聞かず，壁を這う蜘蛛を捕まえて食べようとするシーンである。

"Put it [the spider imprisoned in Mariko's hands] back in the corner, Mariko."
"What would happen if I ate it? It's not poisonous."
"You'd be very sick. Now, Mariko, put it back in the corner."
Mariko brought the spider closer to her face and parted her lips.
"Don't be silly, Mariko. That's very dirty."
Her mouth opened wider, and then her hands parted and the spider landed in front of my lap. (Part I, Chap.5, p.82)

マリコに蜘蛛を本当に食べる意志があったかどうかは別として，自分を猫の立場に置き換えようとする衝動は十分に感じられる行動である。マリコにとって，現実の世界と想像の世界との区別は常に不確かなものでしかない。彼女の内面世界においては，子猫の生は自分自身の生と一体であった。そして言うまでもなく，追想の最後に起こるサチコの子猫殺しは，マリコ殺しの象徴的代換物に他ならない。それを証明するように，サチコの子猫殺しには「東京の女性」の子殺しのイメージが強く重ねられている。サチコは泥だらけの草の上に跪き，着物の袂を濡らしつつ自らの手で子猫を溺死させようとする。

She put the kitten into the water and held it there. She remained like that for some moments, staring into the water, both hands beneath the surface. She was wearing a casual summer kimono, and the corners of each sleeve touched the water.
Then for the first time, without taking her hands from the water, Sachiko threw a glance over her shoulder towards her daughter. Instinctively, I followed her glance, and for one brief moment the two of us were both staring back up at Mariko. (Part II, Chap.10, p.167)

ここには肘まで水に浸かりつつ，跪いて子供を溺死させようとしていた「東京の女性」の姿が明らかに再現されている。さらに，あたかもこの「女性」を演じるかのように，サチコは子猫を水につけたままマリコを振り返りさえするのである。こうした詳細部分の記憶の信憑性を客観的に確認する術はないが，エツコ自身の罪悪感が記憶に潤色を施し，無意識に子殺しの連鎖を完成しようとしていたと考えることができる。上記の引用中，マリコを振り返るのはサチコのみならずエツコ自身でもあるのである。サチコの象徴的マリコ殺しを黙認し，結果的にそれに荷担するエツコのイメージが，巧みに追想の中に織り込まれていることがわかる。この点については，マリコの目から見るエツコ像という観点から考えてみるとさらに明らかになる。

マリコの目には，エツコは時に「川向こうに住む女性」と重ねられる。エツコとマリコの初めて

の出会いの場で，ぬかるんだ川辺に立つマリコに声をかけるエツコに対して、マリコは猜疑と恐怖の態度を向ける。

Mariko did not reply. Instead, she took a step away from me.
"Careful," I said. "You'll fall into the water. It's very slippery."
She continued to stare up at me from the bottom of the slope. . . .
"I was just speaking with your mother," I said, smiling at her reassuringly. "She said it would be perfectly all right if you came and waited for her at my house. It's just over there, that building there. You could come and try some cakes I made yesterday. Would you like that, Mariko-San? And you could tell me all about yourself."
Mariko continued to watch me carefully. Then, without taking her eyes off me, she crouched down and picked up her shoes. At first, I took this as a sign that she was about to follow me. But then as she continued to stare up at me, I realized she was holding her shoes in readiness to run away.
"I'm not going to hurt you," I said, with a nervous laugh. "I'm a friend of your mother's." (Part I, Chap.1, pp.16-7)

マリコを自宅へと誘うエツコの言葉には，後にマリコが口にする「川向こうの女性」の言葉との明らかな重複が見られる。マリコのなかで，エツコと「女性」との混同が生じるのはこの瞬間である。たびたび行方をくらましては周囲を慌てさせるマリコだが，ぬかるみの中を自分を追ってくるエツコに対する彼女の恐怖は，「縄」のイメージを用いて象徴的に表現されている。まず，前掲の蜘蛛を食べようとした場面の直後，姿を消したマリコを追う途中，濡れた草の中で「蛇」のように足に絡まりつく「縄」を外して手に持つエツコに対して，マリコは次のような執拗な反応を示す。

"What's that?" she asked.
"Nothing. It just tangled on to my foot when I was walking."
"What is it though?"
"Nothing, just a piece of old rope. . . ."

さらに，

"Why have you got that?"
"I told you, it's nothing. It just caught on to my foot." I took a step closer. "Why are you doing that, Mariko?"
"Doing what?"
"You were making a strange face just now."
"I wasn't making a strange face. Why have you got the rope?"
"You were making a strange face. It was a very strange face."
"Why have you got the rope?"
I watched her for a moment. Signs of fear were appearing on her face. (Part I, Chap.6, pp.83-4)

この後マリコは，エツコを置き去りに家へと駆け戻る。これとほぼ同じやりとりが，サチコの子猫殺しの直後，川にかかる木の橋の上にうずくまるマリコと，彼女を追ってきたエツコとの間で交わされる。

> The little girl was watching me closely. "Why are you holding that?" she asked.
> "This? It just caught around my sandal, that's all."
> "Why are you holding it?"
> "I told you. It caught round my foot. What's wrong with you?" I gave a short laugh. "Why are you looking at me like that? I'm not going to hurt you."
> Without taking her eyes from me, she rose slowly to her feet.
> "What's wrong with you?" I repeated.
> The child began to run, her footsteps drumming along the wooden boards. She stopped at the end of the bridge and stood watching me suspiciously. I smiled at her and picked up the lantern. The child began once more to run. (Part II, Chap.10, p.173)

この会話には「縄」を表す言葉は出てこないにもかかわらず，先の引用場面との明らかな重複によって，二人が指すものが「縄」であることは容易に想像できる。マリコによるエツコと「川向こうの女性」＝「東京の女性」との混乱した同一視は明らかであり，「縄」はその子殺しのイメージを象徴する。暗闇の中でエツコと一対一で向き合うとき，マリコの内部の潜在的恐怖が表面化し，「縄」によって捕らえられ，殺される予感から逃げ出そうとする衝動が生じると考えられる。そしてさらにこの「縄」は，孤独な首吊り自殺を遂げたケイコの首に絡まっていたであろう「縄」への連想を誘うものであり，極めて意図的に用いられた隠喩であると言える。

こうして「東京の女性」とサチコ，さらにエツコの子殺しのイメージ連鎖が完成する。しかし，全ての追想がエツコ自身によるものであることを考えるとき，この記憶の方向付けが，エツコのケイコの自殺に対する罪悪感の反映であることは明白である。この罪悪感の故にこそ，エツコはケイコの死を思いつつ無意識のうちにサチコ母子の記憶を手繰り寄せることになったのであり，その意味において連鎖の完成は必然であったと言える。

一方，マリコと「川向こうの女性」の関係には，恐怖だけの一面的なものではないある種のアンビバレンスが認められる。「女性」はいつもマリコを川向こうの自宅へと誘うのだが，必ずしもそれは強引な脅迫ではなく，優しい包容力を示すものでもある。それに半ば引きつけられるように，マリコは頻繁に川縁や川向こうにつながる木の橋へと出かけていく。マリコにとって川の向こう側が象徴するものは「死」であり，「死」に対する恐怖と同時に，それに包まれ抱かれることへの憧れが絶えず彼女を捕らえていたと思われる。マリコを探してサチコとともに初めて向こう岸へ渡ったときの不吉な感触を，エツコは次のように描写している。

> That was the first time I had crossed to the far side of the river. The ground felt soft, almost marshy under my feet. Perhaps it is just my fancy that I felt a cold touch of unease there on that bank, a feeling not unlike premonition, which caused me to walk with renewed urgency towards the darkness of the trees before us. (Part I, Chap.2, p.40)

そこで二人は「不気味な呪文」に縛られたかのように立ちつくすが，ようやく見つけたマリコの姿には，一瞬「死」の匂いが漂う。

> But I remember with some distinctness that eerie spell which seemed to bind the two of us as we stood there in the coming darkness looking towards that shape further down the bank. Then the spell broke and we both began to run. As we came nearer, I saw Mariko lying curled on her side, knees hunched, her back towards us. Sachiko reached the spot a little ahead of me, I being slowed by my pregnancy, and she was standing over the child when I joined her. Mariko's eyes were open and at first I thought she was dead. But then I saw them move and they stared up at us with a peculiar blankness. (Part I, Chap.3, p.41)

そしてサチコは，「壊れやすいが感覚のない人形」のようなマリコの体の傷を確かめる。足の傷から血を流し，水たまりの中で泥水に体を浸して丸くなって横たわるマリコの行動には，「死」への憧れとともに子宮への回帰願望を読みとることができる。母親に見捨てられ，子殺しの恐怖に襲われるなかで，マリコは負の「母性」，「死」の抱擁へと，無意識の逃避的退行を行っていたのではなかろうか。この「母性」と「死」の二律背反性は，当時妊娠中で新しい生命を宿していたエツコにとって，不吉な未来を予言するものともなった。(3)

川の向こう側に対するマリコのアンビバレントな執着は，彼女の川，ぬかるみ，暗闇への異常なまでの愛着に表れる。暗くなると一人外へ出かけたがり，ぬかるむ川辺で裸足になって泥だらけになるマリコの行動には，「死」への親和感と「死」が持つ「母性」への限りない渇望が読みとれる。このマリコの押さえがたい衝動が，孤独の中で自殺を選択するケイコの衝動と重なって感じられるのは言うまでもない。イシグロはケイコの自殺に至る経緯を詳しく説明していない。エツコとニキの会話から，エツコがケイコの生まれた7年後にジローと離婚し，イギリス人と再婚したこと，その後イギリスに渡るがケイコは引きこもりに陥り，自宅を出て6年後，マンチェスターのアパートで孤独な自殺を遂げたことが分かるのみである。しかし，サチコの人生の選択とマリコの心の傷を辿るプロセスにおいて，私達はそこにエツコとケイコのその後の人生を重ね合わせ，ケイコの自殺に至る心理を推察することができるのである。

価値観の変化

エツコは，1970年代後半の現実から，遠い1950年前後の記憶を手繰り寄せる。記憶の対象であるサチコとマリコは今では遠い知人に過ぎない。しかし，エツコにとって最も遠いと言えるのは，当時のエツコ自身ではなかろうか。この2, 30年で最も大きな変化を遂げたのは，エツコの価値観そのものなのである。

1950年前後，すでに日本が大きな価値の変換期にあったことは作品中随所に説明されている。なかでも，義父オガタと息子ジローや若い後輩マツダ・シゲオ（Shigeo Matsuda）との間の軋轢を通して，新旧の価値観のズレを鮮明に読みとることが出来る。(4) オガタは，戦後の日本に急速に広まった民主主義的な価値観に強い不快感を示す。ジローを訪ねてきた会社の同僚が，夫婦喧嘩の末に妻と別々の政党に投票したことを冗談交じりに話したことに対してすら，彼は驚きを禁じ得ない。「数年前なら，考えられなかったことだ」と言い，「アメリカから熱心に学んだものが，すべていいもの

とは限らない」（Part I, Chap.4, p.65）と言って，夫婦関係にまで浸透し始めた「民主主義というもの」を憂えている。戦後共産主義思想に傾倒し，恩を受けたオガタ達が懸命に築いてきたものとは知りつつも戦前の教育方法を正面から批判せざるを得ないマツダに至っては，オガタの理解を遙かに超えたものとなる。直接詫びを入れさせようとマツダを訪ねるものの，二人の思想には埋めがたい距離があり，空しい別れ方をする結果となる。

オガタが代表するこうした古い価値観に対して，エツコは強い賛同の言葉こそないものの，絶えず寄り添い支持する態度を示す。例えば，結婚に際して父オガタとの別居を主張したのはジローであり，それに対してエツコは驚いたという。父の訪問を煩わしいと考え，あくまで仕事を優先しようとするジローの態度に傷つくオガタを，エツコは暖かく支えている。さらに教育関係の論文で恩人オガタを名指しで批判したマツダに対しては，オガタと一緒になって腹を立てる。こうしたエツコのオガタへの同調は，戦後身寄りの無かった彼女を引き取り，娘のように世話をしてくれたオガタに対する無条件の共感と考えるべきなのかも知れない。小野寺健は，エツコのオガタに対する特別な感情について，「戦争中の自分の行為の正しさに自信を持っていて頑固ではあるが，人間として節操があり，愛情のふかい緒方さんを，悦子は愛している。朝鮮動乱の特需景気で忙しいドライな会社員の夫二郎よりも愛していることさえ，それとなくわかってくる」と述べている。(5) エツコに甘えるオガタと，オガタをまるで子供のように扱うエツコとの会話の「いちゃつきめいた」独特の親密さには，確かに戦後の過酷な時期を支え合った過去の経緯を感じさせるものがある。しかし，1950年当時すでに時代遅れのものであったと考えられるオガタの価値観に，こうして違和感なく同調するエツコの態度は，次第に皮肉な自己矛盾を生み出すことになるのである。

若いエツコの保守性は，サチコを見つめる彼女の目に最も典型的に現れる。サチコはオガタの理想とする女性像とは対照的な価値観を持つ女性である。彼女にとっては恋人フランクとの関係が最優先であり，まだ10歳前後で保護を必要とするマリコを一人にして，たびたび外出してしまう。エツコはそれを身近に見ながらマリコのことが心配でならず，お節介とは知りつつ母子の生活に関わりを保ち続ける。さらに，詳しく聞けば聞くほどサチコの今後の生活は不安定で，ジローとの安定した生活に満足すべきと考えるエツコには，信じられないものと思えるのである。当初サチコはアメリカへ行くというフランクの言葉を信じて移住を考えているが，これはエツコにとって想像を絶する選択である。マリコを気遣うエツコとサチコとのやりとりは，以下の通りである。

"Actually," I said, "it was Mariko I had in mind. What will become of her?"

"Mariko? Oh, she'll be fine. You know how children are. They find it so much easier to settle into new surroundings, don't they?"

"But it would still be an enormous change for her. Is she ready for such a thing?"

Sachiko sighed impatiently. "Really, Etsuko, did you think I hadn't considered all this? Did you suppose I would decide to leave the country without having first given the most careful consideration to my daughter's welfare?"

"Naturally," I said, "you'd give it the most careful consideration."

"My daughter's welfare is of the utmost importance to me, Etsuko. I wouldn't make any decision that jeopardized her future. I've given the whole matter much consideration, and I've discussed it with Frank. I assure you, Mariko will be fine. There'll be no problems." (Part I, Chap.3, p.44)

ほかの何よりマリコのことを考えて決断したという強気の答えにも関わらず，フランクの裏切りによって，結果的にサチコのこのアメリカ行きは実現しない。それに対するサチコの言い分は次の通りである。

"As a matter of fact, Etsuko, I'm rather glad things have turned out like this. Imagine how unsettling it would have been for my daughter, finding herself in a land full of foreigners, a land full of Ame-kos. And suddenly having an Ame-ko for a father, imagine how confusing that would be for her. Do you understand what I'm saying, Etsuko? She's had enough disturbance in her life already, she deserves to be somewhere settled. It's just as well things have turned out this way.

I murmured something in assent.

"Children, Etsuko," she went on, "mean responsibility. You'll discover that yourself soon enough. And that's what he's really scared of, anyone can see that. He's scared of Mariko. Well, that's not acceptable to me, Etsuko. My daughter comes first. It's just as well things have turned out this way." (Part I, Chap.6, p.86)

「マリコのために」進めてきた計画だが，実現不可能と分かった今となっては，「マリコのために」こういう結果になって良かったと言うサチコの言葉には，誰の目にも明らかな矛盾が含まれている。サチコの言葉には，この種の自己欺瞞が散在している。

やがて伯父の家へ帰る決心をし，伯父と娘のヤスコ（Yasuko）からも歓迎の意思表示があるにもかかわらず，サチコの選択はフランクの言葉に従って神戸に転居し，彼がアメリカへ呼び寄せてくれるのを待つというものである。裏切りを続けたフランクの言葉に信頼を置くことは難しく，将来サチコ母子がさらに悲惨な運命を引き受けざるを得なくなるのは自明と思われる。にもかかわらず，サチコは再び一転してアメリカ行きの優位性を強調する。

"And Mariko would be happier there. America is a far better place for a young girl to grow up. Out there, she could do all kinds of things with her life. She could become a business girl. Or she could study painting at college and become an artist. All these things are much easier in America, Etsuko. Japan is no place for a girl. What can she look forward to here?" (Part II, Chap.10, p.170)

エツコは，サチコが伯父の家での静かで安定した生活を選び，自分の恋愛など忘れてマリコのことだけを考えて暮らしてやればいいのにと心の中で強く思っている。作中一言もそのような表現はされないにもかかわらず，私達にはそのエツコの声が聞こえてくる。なぜならば，エツコの記憶のフィルターを通したサチコの言葉は，絶えず矛盾と自己中心性が強調されており，誰もがサチコに反感を覚えるように構成，再現されているからである。しかし，例えばエツコが考えるような「安定」を選んだと仮定して，本当にサチコが幸せになれるかどうかは疑問である。そしてそれを証明するのは，皮肉にもエツコ自身なのである。

実はその予兆はすでに二人の会話の中に潜在的に存在していた。同じくアメリカ行きについて話し合うなかで，「自分に嫉妬しているのか」というサチコの問いに刺激をされて，エツコが思わず自分の幸せを主張する次のような場面がある。

"Mariko will be fine in America, why won't you believe that? It's a better place for a child to grow up. And she'll have far more opportunities there, life's much better for a woman in America."

"I assure you I'm happy for you. As for myself, I couldn't be happier with things as they are. Jiro's work is going so well, and now the child arriving just when we wanted it. . ."

"She could become a business girl, a film actress even. America's like that, Etsuko, so many things are possible. Frank says I could become a business woman too. Such things are possible out there."

"I'm sure they are. It's just that personally, I'm very happy with my life where I am." (Part I, Chap.3, p.46)

池澤夏樹は，この会話における言葉のすれ違いの妙を指摘し，それがその後の二人の皮肉な運命をみごとに暗示していると述べている。[6] しかしここで，エツコはなぜこんなにも繰り返し自分の幸せを主張し，自ら確認する必要があったのか。今の安定以上の幸せがあるはずがないと信じるものの，サチコの選択を聞くにつけ，無意識の不安が彼女の心をよぎっていたのではなかろうか。作品中，エツコとジローのコミュニケーションはほとんどなく，二人の結びつきの根拠は希薄である。サチコとの出会いが，エツコにそれに気づかせてしまうきっかけを与える結果となった可能性は否定できない。小野寺が指摘するように，「悦子自身に生活の空白がなかったならば、彼女がそれほど佐知子母子にかかわりを持つ必然性はない」のである。[7] しかし，これは全てエツコの意識下で起こっていた無自覚の揺らぎであった。

前述のように、エツコの人生の四半世紀に渡る空白部分には激動の変化が隠されている。これはエツコ個人のみならず，日本という国の価値観そのものの大きな変化を示唆している。若いエツコの批判的まなざしにも関わらず，彼女はやがて自分自身がサチコの選択を生きていくことになるのであり，ケイコの運命はマリコのそれを引き継ぐものとなる。サチコのマリコ殺しがあくまで象徴的なものであったのに対して，エツコのケイコ殺しは結果的に現実のものとなるのである。

ニキとの会話の断片をつなぎ合わせることによって，かろうじて辿ることのできるエツコのその後の人生は，以下の通りである。彼女は日本文化を研究するイギリス人ジャーナリスト，シェリンガム（Sheringham）と長崎で出会い，ジローとの離婚交渉の末に彼と再婚するに至る。さらにエツコは，シェリンガムとともに日本を捨て，イギリスへ渡ることを選択する。堅実で誠実だが退屈な男性ジローは，夫としての魅力は急速に失って行くものの，ケイコと過ごした７年間，申し分ない父親だったという。エツコはケイコが父親を恋しがるだろうことを知りつつ，マリコとほぼ同年齢の彼女を父親からはもちろん日本からも引き離してしまう。これはかつてのオガタが聞けば驚く生き方であり，彼の保守的価値観に寄り添い，サチコの決断を不道徳なものと見なした過去のエツコ自身をも驚かさずにはおかない選択である。サチコに出会った夏からわずか数年の間に，これほどの人生の方向転換をしたエツコの生き方そのものが，この作品のテーマの中心をなしている。

イギリスへ渡ったケイコは，やがて生まれてくる次女ニキを含む家族３人に対して心を閉ざし，義父シェリンガムからも理解されることなく孤独な生活を送る。やがて２，３年にわたって家族を寄せ付けない完全な引きこもりに陥った後，家を出てマンチェスターで一人暮らしを始めるが，その６年後，孤独なアパートの一室で自ら命を絶つに至る。もちろんこれは，かつてのマリコが辿ったかもしれない成り行きであり，渡英前のケイコの不安な心理は，前述のマリコのそれに重ねて推測

することができる。

渡英後約20年が過ぎて，シェリンガムにもすでに先立たれているエツコは，ケイコの自殺という重い現実を一人で背負っている。この現実が，長崎での離婚，再婚，渡英という人生の大きな決断の最終的結論であると受け止める彼女は，自己の責任を痛切に意識している。その自覚ゆえに，エツコはサチコの言葉をより一層批判的に思い出すのであり，それを辿ることによって自己の独善性を弾劾せずにはいられない。追想は自虐的行為となり，サチコへ向けられた非難の眼差しは，そのままエツコ自身へと向けられる刃となるのである。

しかしその一方で，エツコは"My motives for leaving Japan were justifiable, and I know I always kept Keiko's interests very much at heart." (Part I, Chap.6, p.91) と自己の選択を正当化する態度も見せる。これはサチコの言葉をそのまま再現するものであり，エツコはサチコの自己欺瞞を避難する一方で，自らそれを容認し，当時のサチコの追い詰められた気持ちに共感を覚えずにいられない皮肉を噛みしめる。現実がどんなに過酷なものであっても，エツコはそれから逃れず生き続けて行かねばならないのであり，自己を支えるために過去の選択を正当化しようとする彼女のこの欲求は，ほとんど本能的なものであるとも言える。こうして，エツコの意識の中では，過去の選択に対する後悔と，自己正当化の衝動とが激しくせめぎ合いを続けるのである。

変化の容認

イシグロの初期3作品には，いずれも，前述のエツコにみられるような，後悔と自己正当化に揺れ動く主人公の心理が描かれている。*An Artist of the Floating World*の画家オノ・マスジ（Masuji Ono）は，戦時中の自己の愛国主義的作風への転換と仲間の密告とも言える行為が，現在の娘の結婚話に及ぼす思いがけない影響を巡って，複雑な心境を語っている。*The Remains of the Day*の執事スティーヴンス（Stevens）は，かつて心からの信頼を寄せて仕えた主人のナチス擁護の行為と，女中頭との心のすれ違いを追想しつつ，信念を貫いた満足感の陰に苦い後悔を滲ませずにはいられない。

エツコも，オノも，スティーヴンスも，過去に関する後悔をうちに抱えつつ現実を生きていこうとする人物であり，そのためには自己の過去の選択に対する何らかの正当化を行わざるを得ないのである。イシグロの作品には，主人公達のこの「苦い前進」を容認し，包み込もうとする肯定的人生観がある。

小野寺が指摘するように，イシグロが初期3作品で取り上げた戦後とは，価値のパラダイムが大きく転換していく時代であった。[8] 2つの価値観の過渡期を生きる人々は，個人の意図を越えたところで生じる認識の変化に弄ばれ，正しいと信じた選択を強い後悔を持って振り返らざるを得ない状況を経験する。戦後とは，そうした状況を設定するには恰好の時代であり，イシグロはそれにこだわった。登場人物達は，人生に対する己の誠意を繰り返し確認しては，「やむを得なかった」という結論に至らざるを得ない。確かに，彼らに自己矛盾を起こす意図はなく，その時どきを誠実に生きようとした結果が現実なのであり，不可避の運命によって外側から人生に歪みがもたらされたとも言える。彼らは変えることのできない現実から振り返って，過去の自己矛盾を正当化しようとする。価値観の大きな転換にもかかわらず，彼らは一貫した自己を保たねばならないのであり，これは彼らが生き続けていくための必須の条件となる。

この点に関して，イシグロの文学は自己正当化，自己欺瞞，「記憶の恣意性」の文学であり、彼は

それに対して冷ややかで皮肉な眼差しを向けているという見方がある。[9] しかし，彼の文学の最大の特徴は，矛盾を抱える様々な人生に対して最終的に与えられる擁護・肯定の姿勢にあるように思われる。それを最もよく表しているのは，後悔に苦しむ主人公達の心を支え，彼らの過去の過ちを容認しようとするささやかだが貴重な「救い」の存在である。*A Pale View of Hills* の場合，この「救い」の役割を果たすのはニキである。ニキは20歳くらいと思われるが，すでにエツコのもとを離れてロンドンで一人暮らしをしている。ケイコの死に際しては葬儀にも出席しなかったが，田舎に一人で暮らすエツコを心配して，生まれ育った家を久しぶりに訪れている。ケイコにまつわる暗い思い出しかない実家で不眠症は悪化し，ニキの居心地は決していいとは言えない。できれば遠ざかっていたいと思っているだろう家へニキが訪ねてきたことについて，エツコは「使命感」によるものだと考えている。

> In many ways Niki is an affectionate child. She had not come simply to see how I had taken the news of Keiko's death; she had come to me out of a sense of mission. For in recent years she has taken it upon herself to admire certain aspects of my past, and she had come prepared to tell me things were no different now, that I should have no regrets for those choices I once made. In short, to reassure me I was not responsible for Keiko's death. (Part I, Chap.1, pp.10-11)

ニキは，現代の若い女性らしく，進歩的な女性観を持っている。結婚は無意味で子供は自分の自由を損なうものでしかない，というのがニキの言い分である。子供と夫にしばられて惨めな人生を送っていながら勇気を出してそれを解決することができない女性が多いなかで，自分の人生に決断を下したエツコの行為は誇るべきものだと言って，ニキは母の過去を繰り返し擁護する（Part I, Chap.6, p.89-90）。そして，19歳の未婚の友人が子供を産んだことに関するエツコの否定的評価に対しては，その保守的結婚観に反発し（Part I, Chap.3, p.48-9），さらに帰宅する日の明け方，過去を振り返って自らを責めるエツコの弱気な態度に対しては，リスクを冒さず，何もしないで漫然と生きるのは愚かだと激しく反論する。

> "But you see, Niki, I knew all along. I knew all along she wouldn't be happy over here. But I decided to bring her just the same."
>
> My daughter seemed to consider this for a moment. "Don't be silly," she said, turning to me, "how could you have known? And you did everything you could for her. You're the last person anyone could blame."
>
> I remained silent. Her face, devoid of any make-up, looked very young.
>
> "Anyway," she said, "sometimes you've got to take risks. You did exactly the right thing. You can't just watch your life wasting away." . . . .
>
> "It would have been so stupid," Niki went on, "if you'd just accepted everything the way it was and just stayed where you were. At least you made an effort." (Part II, Chap.11, p.176)

こうしたニキの態度は常に辛口で決してソフトなものとは言えないが，過激なフェミニズムを装いつつ，さりげなくエツコの人生を支えようとするものであり，「過去のことなど何も知らないくせに」と思いながらも，エツコはニキの存在に癒されていくのである。エツコを支えるニキの「救い」

としての存在を象徴的に表す場面がある。風雨にさらされて倒れたトマトの若木をさりげなく立て直す，ニキの次のような行動である。

> "I think I'll go and do the goldfish now," she said.
> "The goldfish?"
> Without replying, Niki left the room, and a moment later I saw her go striding across the lawn. I wiped away a little mist from the pane and watched her. Niki walked to the far end of the garden, to the fish-pond amidst the rockery. She poured in the feed, and for several seconds remained standing there, gazing into the pond. I could see her figure in profile; she looked very thin, and despite her fashionable clothes there was still something unmistakably childlike about her. I watched the wind disturb her hair and wondered why she had gone outside without a jacket.
> On her way back, she stopped beside the tomato plants and in spite of the heavy drizzle stood contemplating them for some time. Then she took a few steps closer and with much care began straightening the canes. She stood up several that had fallen completely, then, crouching down so her knees almost touched the wet grass, adjusted the net I had laid above the soil to protect the plants from marauding birds. (Part I, Chap.6, pp.91-2)

部屋のなかからすでに倒れたトマトの若木を見つめていたニキは，おそらくそれが気になっていた。彼女は，激しい自然の力の中で打ちのめされ，起きあがることのできないトマトの若木に母の姿を見ていたのであろう。金魚に餌をやると言って出かけ，その帰り道を装ってさりげなくトマトに近づき添え木を立て直す彼女の行為には，ニキらしいドライでシャイな思いやりがよく表れている。ニキを窓越しに見つめるエツコの目には，ニキは痩せて子供っぽく頼りなげに映る。自分自身も負っているであろう精神的ダメージを隠して，母の人生をさりげなく支えようとするニキの姿には，痛々しい「使命感」が漂っている。

こうした「救い」の要素は，*An Artist of the Floating World*のオノの孫イチロー（Ichiro）や，*The Remains of the Day*の結末部分でスティーヴンスが出会い，不覚にも涙を見せることになる見知らぬ男性，さらに最新作 *When We Were Orphans*（2000）において，主人公バンクス（Banks）が引き取り世話をする孤児ジェニファー（Jennifer）にも認められる。彼らは決して大きな存在ではないが，彼らの「救い」がなければ主人公達は前進する力を持ち得なかったかも知れない。彼らは，現実を前にたじろぎ，立ちつくす主人公の背中を，ささやかな力でそっと後押しする役割を果たす。そして彼らこそ，イシグロが作品に送り込んだ，肯定的人生観の使者とも言うべき存在なのである。Adam Parkesは，イシグロが日本との結びつきを強調されることに対して示す嫌悪感について語り，彼が三島由紀夫によって固定化された「自殺を好む日本人」という西洋のステレオタイプを否定するプロットを選んだことを指摘している。[10] しかし，主人公以外の人物に関してはケイコを始め自殺者の話題が複数登場することから，彼が敢えて主人公達に自殺を選ばせない理由は，さらに根源的な人生観に求められるべきであると考えられる。[11]

二つの文化

イシグロはなぜ価値の転換期である戦後にこだわり，その変節を生き延びようとする主人公達を

肯定的に描き続けたのだろうか。*A Pale View of Hills* のエツコの場合も，転換点を挟む二つの価値観が「過去」と「現在」の対比として描かれる。そしてそれは1950年前後の「長崎」と，数年後の移住から現在に至る「イングランド」という時空間の対比に重ねられる。すなわち，「過去（長崎）」と「現在（イングランド）」が代表する二つの価値観の矛盾を内に孕みつつ，そこに一貫した自己を取り戻し，未来に向けて生きていこうと歩み出すエツコの姿が描かれるのである。ここには，自分のなかの「日本人としての過去」を否定することなく「イギリス人としての現在」を生きようとするイシグロ自身の問題の，明確なアレゴリーを読み取ることができる。イシグロもまた二つの文化の価値観を含むことの矛盾と分裂に苦しみつつ，そこに一貫した自己を確立していこうとしたのであり，自己の人生のダブルスタンダードを肯定するためには，人生の変節を乗り越え，そこから立ち上がっていく主人公の姿を肯定的に描く必要があったと考えられる。オノとスティーヴンスの場合は，この対比をそれぞれ長崎とイングランドの内部に据え直し，問題をさらに普遍化したに過ぎない。エツコを始めとする主人公達が経験する自己矛盾の苦しみは，イシグロ自身の人生の屈折の苦しみを表しており，そこから希望を見いだして歩み始めようとする主人公達の姿には，イシグロ自身が信じる人生の道筋が示されていた。イシグロ文学の重要なテーマは，戦後が代表するパラダイムの変換点を背景に，その変化に振り回されつつも自己のアイデンティティ模索する登場人物達の生き様なのである。

それでは，イギリス人として生きる現在のイシグロは，どのようにして過去の日本を受け入れ，自己のアイデンティティを築いていくのだろうか。Parkesが述べているように，イシグロは彼の日本人的要素を強調する批評に強い反発を示し，それを表すインタヴューの言葉は数多く報告されている。しかし，Suzie Mackenzieは，*Guardian* 誌上の最新作 *When We Were Orphans* に関する解説記事のなかで，イシグロの日本に関するいくつかの興味深いコメントを紹介している。[12]

まずイシグロは，長崎からイギリスへの移住の際，短期間の予定で出発したものが結果的に永住になったことを挙げ，そのために日本との別れが曖昧なものとなってしまい「気づいたときには遠い存在となっていた」と述べている。また，移住10年後の祖父の死について，その本当の意味が分かったのは後のことだったと言う。祖父は幼い彼にとって留守がちな父に代わって父親役を果たしてくれた存在であり，移住後もイシグロと日本との絆を切らぬよう，日本の子供文化を頻繁に小包にして送り届けてくれたという。すなわち，結果的に，祖父の死は彼と日本との絆の一方的断絶を意味していたと思われる。イシグロは祖父の葬儀に出席できなかったことに対して言い訳めいたコメントをしているが，これはニキのケイコの葬儀への欠席の言及を想起させて興味深い。これら二つのエピソードは，イシグロと日本との別れが，彼自身の意志に関わりのないところで避けようもなく訪れたこと，そして彼が明確な意識のもとに日本との決別を果たす機会を逸して来たことを語っている。

さらにイシグロは，「もし10年早く生まれていたら，私は原爆投下の時に生きていただろう」と述べているが，この言葉にMackenzieは彼の「謂われのない罪」の意識を読みとっている。イシグロの母は原爆被害者であるが，自身の怪我のために投下直後の地獄のような恐怖を見ずに済んだためか，原爆に関して懐かしさすら感じると語ったという。原爆に関する情報を主に母から得たイシグロも，この懐かしさを共有していると述べている。「懐かしむ」('miss') という動詞は，原爆を語るには不謹慎で逆説的な言葉とも思えるが，イシグロが伝えるのは，原爆投下後の長崎に対する彼の抑えがたいノスタルジアであると思われる。原爆も戦後も体験していないにも関わらず，原爆の

悲劇的被害から懸命に立ち上がり，町の復興に努力した長崎の人々の姿が無意識のうちに彼の記憶に刻まれ，幼い頃からイシグロは彼らの痛みに対するある種の共感を育んで行ったものと考えられる。Mackenzieはイシグロの親族が受けた原爆被害を複数例報告しているが，被爆というものの性質上，被害は彼の長崎での短い人生にも，身近な人々の死や闘病という形で何らかの影を落とす結果となったと思われる。ちょうどマリコが5歳の時に目撃した女性の子殺しの意味を直感的に理解したように，幼いイシグロも，町が秘めている悲しい過去を自分の問題として感じ取っていたのであろう。*A Pale View of Hills*の長崎の人々の描写には，原爆の悲劇と悪夢の記憶が絶えず影のように寄り添っている。そしてその痛みを背負っていないことに対する「謂われなき罪悪感」を抱えつつ，イシグロは長崎との，日本との関係を，合理的に精算できないままに引きずっていくのである。[13]

以上のコメントは，イギリス国籍を獲得し，日本語さえ自由に操れなくなったという現実にも関わらず，イシグロの内面には，なお日本に対する断ち切り難い複雑な思いがあることを示唆している。Mackenzieは，イシグロが1989年の短い「作家としての旅行」を除いて一度も日本に帰国していないことを指摘し，ヨーロッパやアメリカへの旅には頻繁に出かけていることから判断して，「意図的に帰国を避けているとしか考えられない」と述べている。これに関連して，イシグロは次のようなコメントを残している。

> "Because, in my head, all these people are still alive. Against all rational knowledge, somewhere I believe that everything is running smoothly there, much the same way as it always did. The world of my childhood is still intact."

これは，イシグロのなかで今なお昔のままに生き続けている幼年時代の日本のイメージが，帰国することによって壊されるのを拒んでいるとも解釈できる言葉であり，Mackenzieの推測を裏付けるものと言える。前述のように日本との明確な決別ができないまま，日本に対する「謂われのない罪悪感」とノスタルジアを引きずってきたイシグロだが，彼の想像の中にある1950年代の日本は，時間が経つにつれて急速に現実から乖離したものになって行ったと考えられる。なぜなら，イシグロが移住した1960年以降，日本は名実ともに大きくその姿を変えたのであり，1950年代のエッセンスを残すものはほとんど皆無となったと言えるからである。イシグロはその距離を縮めることよりも，「遠くかすかな山並みの風景」('A Pale View of Hills') のように淡い日本の記憶を，彼の想像力の世界に囲い込み，手つかずの状態に守ることによって，彼独自の非現実的空間として定着させて行こうとしているように思われる。そしてそこに自己のルーツを保持しつつ，作品のなかで一つの抽象としての日本を描いていくことこそ，作家イシグロと日本との理想的関わり方であるという認識に至ったのでははなかろうか。その意味において，リアリズム作家として評価を受けることに対する彼の抵抗はもっともなものである。彼独自の日本のイメージは，第4作目の*The Unconsoled*（1995）および最新作*When We Were Orphans*に見られる幻想的世界において，さらに発展的に扱われることとなる。

前述のように，自己の日本人的要素を強調され過ぎることから日本に関する質問を受けることを極端なまでに嫌ったイシグロだが，Mackenzieは，彼がかつてに比べて日本について多くを語り始めたと言い，「日本が自分にとってより関わりを持つものに思え始めた。何と言っても私は日本人の両親に育てられたのであり，ある程度日本の価値観に馴染んでもいるのだ」という彼の最近のコメントを紹介している。これは，イシグロが長い迷いと揺らぎの末に，自己と日本との関係にある折

り合いをつけ，現在の自分のなかにある「過去の日本」をあるがままに受け入れる道を見いだしたことを意味しているのではなかろうか。しかし，ここに至るプロセスには，様々な意識上の模索があったと想像される。そしてそのプロセスこそ，彼の主人公達が経験する「自己矛盾との闘い」として初期の三長編中に表現されているものなのである。

作品のタイトル'A Pale View of Hills'とは，象徴的には前述のように「遠くに霞む過去（日本）の記憶」を指していると考えられるが，より直接的には，エツコの住むアパートの窓から見える市西部の「稲佐山」の風景を指していると思われる。[(4)] 第 7 章に描かれる稲佐へのエツコ母子とのピクニックは，エツコの過去の記憶のなかで唯一と言っていいほど晴れやかで明るいものである。晴天のなか，エツコは母親らしく，マリコは子供らしく振る舞い，エツコはいつもになく穏やかで心和やかな時間を過ごしている。帰り道にマリコがくじ引きで当てた野菜ケースが結果的には子猫殺しの道具となるわけだが，この一日に限定して言えば，まさに別世界のように和やかな記憶を呼び覚ましている。稲佐の山から見下ろした港には，町の復興を象徴する光景が一面に広がり，未来への希望が漲っている。これは物語の結末部分で，ロンドンへ帰ろうとするニキに長崎をイメージさせるものとして渡されるカレンダーを思い出させる。エツコは，稲佐山からの港の眺めを写したと思われるカレンダーの写真をニキに手渡しつつ,「ケイコが幸せだった頃に家族でケーブルカーに乗ったところ」として稲佐山のことを語っている（Part II, Chap.11, p.182）。作品のタイトルとこの稲佐山の明るいイメージを結びつけたイシグロの意図は，過去に対する様々な後悔と自己矛盾にもかかわらず，過去の記憶のなかで最も明るく輝く部分を信じて，未来へ向けて歩みを続ける勇気の大切さを伝えることにあったのではなかろうか。

過去に対して何らかの矛盾や後悔を感じずにに生きる人はおそらくいないのであり，イシグロが自分の問題として捉えていた「矛盾を孕む人生」というテーマは，全ての人間に共通する普遍的なものであると言える。イシグロ文学の魅力の一つは，人間誰もが持つこの弱みを受け止め，容認して，立ちすくむ人生の帆に静かな風を送ろうとする作者の姿勢にこそあるのである。

《註》

(1) 2001 年 10 月には，イシグロの 12 年ぶり二度目の来日が予定されている。

(2) 正確な年数を特定することに重要な意味はないが，長崎での年数は 1950 年または 1951 年であったと考えられる。これは，第 1 章の「朝鮮で戦争が行われて」（Part I, Chap. 1, p.11）おり，追想の始まりが「6 月の梅雨が明け，日差しが強くなった頃（おそらく 7 月上旬）」（Part I, Chap. 1, p.13）であったとの説明，また第 7 章の「その夏,間もなくアメリカによる占領状態が終わるという話題で持ちきりであった」（Part II, Chap. 7, pp.99－100）との記述からの推測による。朝鮮戦争は 1950 年 6 月 25 日から 1953 年 7 月 27 日まで続き，サンフランシスコ講和条約による事実上の占領の終了は 1951 年 9 月 8 日のことであった。また，ニキは「19 歳の友人より年上である」との記述（Part I, Chap. 3, p.48）から，現在少なくとも 20 歳になっていると思われるが，作品冒頭のニキの名付けに関する記述からは彼女はイギリス生まれであると推測されるため，エツコの渡英後 20 年以上経っているものと判断できる。さらに，ニキが生まれたとき少なくとも 8 歳になっていたと思われるケイコは，存命なら 28 歳以上になっているはずであり，現在の年数が 1978－9 年以上であることがわかる。Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills* (New York: Vintage International, 1982). 以下，ページ数は本文中に記す。

(3) 妊娠中のエツコの子育てに対する不安は作品中に散りばめられている。特に，当時の長崎で幼い子供を殺す連続事件が起こっていたとする記述は，子殺しの恐怖感を強化するとともに，エツコの不安感の高まりを効果的に示している。"Received with more urgency were the reports of the child murders that were

alarming Nagasaki at the time. First a boy, then a small girl had been found battered to death. When a third victim, another little girl, had been found hanging from a tree there was near-panic amongst the mothers in the neighbourhood." (Part II, Chap. 7, p.100)

(4) 古い価値観に執着するオガタの疎外感は，次作 *An Artist of the Floating World* の画家オノ・マスジの苦悩に発展するものと考えられる。

(5) 小野寺健，「カズオ・イシグロの寡黙と饒舌」，『英語青年』第134巻8号（1988年11月），pp. 27－29。さらに小野寺は，イシグロのインタヴューでの言葉を引用して，イシグロが小津安二郎監督の日本映画を好んで見ていたことを指摘している。オガタとエツコの関係には，『東京物語』の老夫婦と亡くなった息子の嫁，紀子との心の交流を思わせるものがある。

(6) 池澤夏樹，「日本的心情からの解放」，カズオ・イシグロ，『遠い山なみの光』（早川書房，2001）pp. 261－275。

(7) 小野寺健，「カズオ・イシグロの寡黙と饒舌」p. 29。

(8) 小野寺健，「訳者あとがきーカズオ・イシグロの薄明の世界」，『遠い山なみの光』pp. 263－268

(9) 岩田託子，『わたしたちが孤児だったころ』書評，日本海新聞，2001年5月14日。「イシグロのテーマは記憶の恣意性。人は過去のできごとをつごうよく解釈し，わい曲した記憶を残す。客観的事実や歴史的事実と照らしあわせ，個人の記憶に潜むこっけいな悲喜劇をあぶりだし，小説は進む」と述べて，各作品はこの同じテーマの変奏であるとしている。

(10) Adam Parkes, *Kazuo ishiguro's The Remains of the Day: A Reader's Guide* (New York, London: The Continuum International Publishing Group, 2001), pp. 11－26.

(11) ただし，ケイコが純粋日本人であることが自殺を説明する十分な理由であるかのような新聞の取り上げ方については，作品中，エツコに批判させることを忘れていない。"Keiko, unlike Niki, was pure Japanese, and more than one newspaper was quick to pick up on this fact. The English are fond of their idea that our race has an instinct for suicide, as if further explanations are unnecessary; for that was all they reported, that she was Japanese and that she had hung herself in her room." (Part I, Chap. 1, p.10)

(12) Suzie Mackenzie, 'Between Two World,' *The Guardian*, March 25, 2000.

(13) Mackenzieは，近年イシグロがホロコーストの記録を次世代に伝えようとする「国際アウシュビッツ委員会」からの招待を始めて受け入れたという事実を報告しているが，このことは彼の原爆に対する「罪悪感」と無関係ではないだろう。原爆の問題をさらに普遍化して据え直し，失われようとしている過去の記憶を守ることこそ現在を生きる者の使命であるとの彼の自覚に基づく決断だと思われる。

(14) 「稲佐山」を遠い 'hills' として言及している箇所は次の通り。"On clearer days, I could see far beyond the trees on the opposite bank of the river, *a pale outline of hills* visible against the clouds. It was not an unpleasant view, and on occasions it brought me a rare sense of relief from the emptiness of those long afternoons I spent in that apartment." (Part II, Chap. 7, p.99)" Inasa is *the hilly area* of Nagasaki overlooking the harbour, renowned for its mountain scenery; it was not so far from where we lived－in fact it was *the hills of Inasa* I could see from my apartment window..." [Italics: mine] (Part II, Chap. 7, p.103)